北門・築地壁

北門は慈尊院の正門の役割を果たしています。臺股と呼ばれる支柱と面取角柱の形状は、この門が室町時代（1392-1573）に建てられたことを示しています。4つの柱があるこの門は、和歌山県内にある同じつくりの門の中では最大級で、県の文化財に指定されています。

門の両側の壁は、板の間で泥と粘土を押し固め、望む高さまで注意深く層を重ねる築地壁と呼ばれる古い技法で築かれました。壁は幅 100メートル、高さ 3メートルほどで、基部の厚さは 1.6メートル弱です。押し固められた泥と粘土は頑強で、壁は何世紀にもわたって数々の大地震に耐え、ほとんど損壊しませんでした。

築地塀の技法は平安時代（794-1185）に中国から日本に伝わりましたが、この壁はおそらく 1540 年代に建設されました。日本に数例しか残っていない築地塀のひとつであるこの壁は、国の有形文化財に指定されています。